『にごりえ』の道行（二）

浅野　洋

承前

拙稿は本誌前号に発表した「『にごりえ』の道行（一）」[注1]の続稿である。前稿（一～五章）では、まず『にごりえ』が〈噂〉や他者の言葉による〈間接話法〉で語られたお力と源七の関係を〈核心〉とする物語だと述べた。次に、描写に具体性を欠くため解釈の揺れる「彼（あ）の人」と「巻紙二尋」の手紙について検討し、「彼の人」とは近年強調された第三者の〈上客〉などでなく源七その人をさし、長大な手紙もお力が〈上客〉に来店を促す手紙などでなく源七がお力に宛てた手紙だと述べ、作中に実体のない〈上客説〉[注2、前出]を誤読として退けた。そうした解釈の背景として、間接話法のため直叙はされないものの、お力の内心には常に源七の存在があることを各場面ごとに具体的に指摘した。そして、お力には自殺した父祖へと繋がる自身の死が早くから意識され、源七への思いが近々〈無理心中〉の形で暴発する予感もあり、父祖伝来の宿命を受け容れる覚悟の日を「盂蘭盆会」当日と定め、そこで初めてお力は自己の来歴を結城に告白したとした。また、問題の「氣が狂ひはせぬか」と感じる異常心理のシーン（五）について、「離人症の症候と符号するところが多い」ものの「過労による一過性の神経症的症候」とする指摘[注3、前出]に対し、そうした精神状態よりも〈泥海＝にごりえ〉すなわち社会の底辺である新開地の銘酒屋街に沈んだまま、先行きの見えぬ泥水の〈濁った視界〉による感覚こそ重要であり、そうした境涯が〈道行〉の形をもたらしたと述べた。以下の「六」「七」「八」章はそうした経緯をふまえている。

六

『にごりえ』末尾の〈心中〉による葬送場面を、「雲中語」[注4、前出]は唐突な終幕で未熟だと批判したが、むしろ必然的な流れだったと思われる。というのも、『にごりえ』の世界には〈心中〉をカタス

トローフとする〈道行〉の物語を連想させる要素があるからだ。前田氏[注5]がいみじくも二人の〈心中〉を「『曾根崎心中』や『心中天網島』の恋人たちとはうらはらに」と評し、朴那美[注6]が「場面設定、人物造型、主題」の三項目について『心中天網島』との詳細な比較を試みたように、近松の典型的な〈道行〉は一葉の念頭にもあったと思われる。もっとも、『にごりえ』はそうした典型とは似て非なる異形の〈道行〉となったが……。

〈道行〉の語自体は、古く万葉の時代からあり、「道を行くこと」「旅をすること」を意味したが、文学表現としては、「旅の途次の地名を次々と詠みこむ」「道行文」と称する形式もあったとされる[注7]。時代がくだり、浄瑠璃や歌舞伎に用いられるようになっても〈道行〉は〈旅の場面〉全般をさす用語で、時代物では一人旅でも同性同士の二人旅や三人旅であっても、その場面を〈道行〉と称した。それが「男女の情死行の場面」として定着し始めたのは、近松の世話物浄瑠璃『曾根崎心中』がヒットして以来で、「相愛の男女が周囲より疎外に遇いながらもその愛を全うするべく死地に赴くという道程こそがいわゆる『道行』の典型」と目されるようになった[注8]。

封建社会の桎梏に抗して相思相愛の絆を貫き、来世を約して死出の旅路へと赴く近世以降に定着した本来の〈道行〉に対し、『にごりえ』はなぜ後述のような異形の〈道行〉となったのか。それは二人の出発点が互いの〈相愛〉ではなく、泥水世界の〈やるせない絶望〉だったからである。そのため、お力と源七は実際に〈死出の旅〉に出ることもなく、二人の間に〈相愛の誓い〉もなく、互いの意思（思惑）も別々である。だが、二人が各々閉塞した人生を清算する手段として〈死〉の決着しかないと思いつめた点だけは合致していた。つまり、二人の道筋はともに〈死〉の世界に向かう後戻りのできぬ過程であり、その結末が〈心中〉の形をとる以上、内実はともあれ〈道行〉の一種とみなしても過言ではなかろう。

前述（前稿「五」）のごとく、お力の「丸木橋をば渡」る決断には源七がらみの〈死の危険〉が予覚されており、彼女自身、源七の手にかかるのは想定内の事態であった。自殺した父祖（六）の末路に自身の人生を重ねるお力には、源七の刃はその宿命を実現するための他者の手をかりる〈自殺〉でもあった。つまり、お力にとって予期どおりの決着である源七との死は〈合意〉ではないものの〈覚悟の心中〉であり、そうしたお力の内心を知らない源七には一人思いつめた果ての〈無理心中〉であった。この二人の齟齬を周囲の人々は知るよしもなく、その不可解さが種々の〈噂〉や臆測の呼び水になったのである。そのように考えると、〈心中〉現場の輪廓もおぼろげに浮かび上がり、その内実をどう捉えるかは『にごりえ』解読の重要な鍵となる。とすれば、二人の死が「無理心中か、合意心中か」の問いを「無用の詮索」（前田氏）として放置するわけにもいかない。たとえば、近年ではあ

まり言及されない関良一の論[注9]は結末を次のように分析していた。

関氏は「無理心中」説と「合意の情死」説の「ふたつの解釈」がともに「誤解である、すくなくとも不十分である」とし、〈噂〉の一節を順に甲・乙・丙・丁「四人の噂話」に分けて整理する。最初の甲が「あの子も……可愛さうな事をした」と無理心中説を述べると、乙は反駁して「イヤあれは得心づくだと言ひまする……」と合意説に立ち、すると丙は乙に反駁して「何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ……たしかに逃げる処を遣られたに相違ない」と無理心中説を強調、さらに丁は「何しろ菊の井は大損であらう……」と話題を転じた、とみる。一方、「この破局以前、お力はすでに自暴自棄になっており、絶望的であり、ほとんど生ける屍であった」ので、「この作品は、最後に、彼女の不幸な死を暗示すれば充分」で、終章の表現は「お力の死を、とりとめもない、無理解な、無責任な傍観者たちの言葉でとりまくことによって、彼女の悲劇を、一層痛切に強調することが、一葉の意図であったのではないか」と結論づける。前田論とも半ば重なる見解だが、さらに「この終章は、一葉にとっては、曖昧でも、難解でも、矛盾でもなかった」とし、「噂話が一見矛盾している」ように見えるのは「事態の時間的経過による変化をそれぞれ部分的にとらえつつ、主観を加えているから」とし、心中現場を次のように推測している。

お力は丙のいうごとく、湯屋の帰りに源七にあった。それからかなりはなれた「お寺の山」（中略）にゆき、談しあい、乙のいうごとく、情死に合意した。しかし彼女は、おそらく決行の刹那に前言をひるがえし、のがれようとした。そこで源七がかっとなって、その背に刃をくわえたのであろう。（中略）ひとたび情死をうべないながら、ぎりぎりのときに身をひるがえしてのがれようとした女に、〔「当初より拒否しつづける女を、背後より斬りつけるごとき性格」ではない源七は〕はじめて真の怒りと憎しみを覚え、とっさに刃をふるったとみるのが自然ではなかろうか。

近年は受容理論等の武装がない素の〈読み〉を恣意的と切り捨てがちだが[注10]、逆に理論武装に忙しく肝心のテキストそのものを本当に読んだのか疑わしい論も散見される。〈読み〉の説得力は理論の有無ではなく、テキスト自体の正確な読みと言語化されない空隙をいかに結びつけ、それが物語全体とどう繋がるかを合理的に述べることであろう。それはともかく、関氏にならい、心中現場について私見を述べてみたい。

湯屋の帰りに出会った（もしくは源七が待ち伏せた）二人は、源七の申し入れで「お寺の山」で話し合いとなり、そこで彼が〈心中〉を真剣に申し出る。すると、お力はその申し出を鼻で笑って拒否し、その場を足早に立ち去ろうと背を向ける。その〈態度〉に〈逆上〉した源七が背後から斬りつけ、お力の死を確認したのち、割腹自殺を遂げた――これが私見による現場状況であ

る。

お力がいったん合意した情死を決行直前に逃れようとしたため怒った源七が切りつけたとする関説と異なり、私見では源七の真剣な申し出を鼻で笑うお力の〈態度〉に〈逆上〉した源七が刃傷に及んだとみる。しかも、お力のその〈態度〉は源七の〈逆上〉を引き出すための意図的な〈演技〉だったと考える。というのも、前述のように、父祖の〈自殺〉を自身の人生に重ね、源七の遠からぬ暴発を予感していたお力にとって、彼の手にかかる〈死〉は半ば予定された〈自殺〉であり、必要なのはそのきっかけであった。現にお力は「盂蘭盆」当日にみずから〈死者の列〉に加わる覚悟を定め、人生を清算する身の上話の告白も終え、死を受け容れる準備は十分に整っていた。そして、源七の自分に対する一途な愛を知りつつも、彼の妻子に対する罪悪感や源七の現状からして、彼の求愛が現実には到底実現不可能な願いでしかないことも熟知していた。それゆえ、お力が源七の思いに応える唯一可能な愛の証しは、彼の〈純愛〉を形にする〈心中〉の実現にひそかに手を貸すことだった。だからこそ彼女は、あえて〈逆上〉を招く〈演技〉に及んだのである。

思えばお力は内心いつも源七のことを気に掛けつつも決してそれを表に出さず、むしろ逆の反応を示すのが常であった。たとえば物語の冒頭近く、お高が「彼の人は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそっとの紛雑（いざ）があらうとも、縁切れになつて溜る物か。（中略）取止めるやうに心がけたら宜（よ）かろ」と源七との復縁を勧めると「御親切に有がたう。御異見は承り置まして、私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さい」とわざと軽い調子で拒絶する（一）。これは一例で、源七との関係に言及されるとお力は常に心にもない言葉や態度をとり続けている。終幕の場面も同様で、源七の真剣さを知ればこそ内心とは逆の鼻で笑う〈態度〉を演じ、彼の〈逆上〉を引き出したのである。表向きは源七による〈無理心中〉と見える末路は、実はお力が仕掛けた〈覚悟の心中〉だったのである。その内情を知らず、お力がなぜ心中の片割れになったかを不思議に思う周囲が、根拠のない臆測や無責任な〈噂〉を流したのである。

ところで、源七の「見事な切腹」には近松最後の世話物浄瑠璃『心中宵庚申』の〈最後場〉の影響が考えられる。『心中宵庚申』の主人公半兵衛は「武士出身の商人という特異な設定」で「親重代の脇差でまず妻を刺し殺し」「二首の辞世を詠んだ後、同じ刃で見事に切腹を遂げる」[注11]。「親重代の脇差」や「辞世」は見えないものの、女を殺して男が自刃するとの流れはお力と源七の〈心中〉現場を想わせ、半兵衛の〈武士出身〉という「特異な設定」が〈士族出身〉をひそかな誇りとする一葉の琴線に触れ、「蒲団や」には不似合いな源七の「見事な切腹」という「死花」の描写を導いたように思われる。

七

上客をつかんで「出世」も可能な若くて美しい売れっ子酌婦と、土方の手伝いに零落した文無しの中年男と、二人の取り合わせはどう見ても不釣り合いで、すぐにも破綻する脆い関係のように思える。しかし、二人の結びつきは意外に強固であった。現状では何の取り柄もない源七との関係をお力はなぜ断ち切ろうとはしなかったのか。

作品中には源七に対するお力の気持ち（本音）はいっさい描かれておらず、そのためかこの問題を明解に論じた先行文献も見当たらない。したがって推測の域を出ないが、お力は、出会った赤坂時代に源七の初心（うぶ）な純真さに魅かれ、菊の井に移った当初は家産の蕩尽もいとわぬ一途さにほだされ、やがて身の破滅もおそれぬ一徹さにお力は自身の「三代伝はつての出來そこね」の血と同質のものを見たのではあるまいか。そして、その同質性に因縁を感じたゆえに無下には切り捨てられず、やがて自身の〈死〉への同行者を見出したと思われる。自殺した父祖との宿縁が自身の人生だと思い込むお力と、出口のない愛執の果てに〈心中〉を見据える源七と、共に〈死〉を覚悟した二人の思いに世間の実利的な〈常識〉は通用しない。世間的にはいかに不合理な関係に見えようと、二人は「出來そこね」の同質性に根ざす因縁に導かれて〈死〉への道に赴くしかなかったのである。

実際の死出の旅もなく、相愛の誓いや来世の約束もなく、背負うべき〈義理〉もない二人の〈心中〉は、本来の「情死行」を意味する「道行」からすれば確かに異質である。しかし、奇妙な〈縁〉を感じて死の同行者となる男女の関係も、特異な〈愛〉の形だとすれば、その結末を〈心中〉に求めた二人の歩みも〈道行〉と称してよかろう。『にごりえ』が、何ひとつ救いのない物語でありながら、多くの読者を魅きつけるのは、ともに泥水の底に沈む〈絶望〉から出発し、同質の奇縁から離れがたい男女が〈心中〉に行き着くまでの切実な道筋が、哀切きわまりない〈愛〉の呪縛と同様に胸に響くからであろう。だが、一葉のリアルな眼は、二人の葬送を見送る最後の〈噂〉を次の言葉で結んだ。

何しろ菊の井は大損であらう。彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしは残念であらう。と人の愁ひを串談（じようだん）に思ふものもあり。

命を賭した「人の愁ひ」にすら「大損」で「残念」だろうと語る〈噂〉にははからずも世間の〈本音〉が透けて見える。いかに「串談」らしく繕ったとしても、そこには庶民の生活感情の奥深くまで浸透した〈損得勘定〉すなわち〈近代〉の金銭の論理が露呈している。最後にこの〈噂〉を点描した一葉には〈人の心＝愁ひ〉ばかりか「世の中」全体をも「浅ましく濁りににご」らせる最大の要因が金銭だとの現実認識があったに違いない。

そういえば、結局は金銭との交換に回収される一葉の作品の中

でも『にごりえ』は最も金銭との交換を急がれ、金銭のために慌ただしく完成を強いられた作品だった。それは『にごりえ』執筆前後の一葉の日常を一瞥すれば明らかである。

『にごりえ』の執筆過程でまず注目されるのは、周知のごとく明治二八年六月二日の一葉日記（「水の上」）であろう。川上眉山の来訪を伝える記述の中で、一葉が自身の「素性」（来歴）を語ると、眉山は「やさしき女性の身としてかくよに立て過し給ふ事よに有がたき人かな、自伝をものし給ふべし（中略）君にして女流文學に志し給ハんか後來日本文學に一導の光を傳へて別に氣魂の天地に傳へるものあるべし　切に筆を持て世に立ち給へ」と賛仰し、一葉が「そゝのかし給ふな、さらでも女子は高ぶり安きを」と応じると、眉山は書肆に仲介の労をとろうとまで熱弁を奮う。この対面が一葉の心に火をつけ、『にごりえ』執筆の引き金になったとされる。

翌日の六月三日、一葉は久しぶりに半井桃水を飯田町に訪ねる。その「笑がほ」は「打くもりたる心のはれたる樣」であったが、五歳の女児にもっぱら相好をくずすだけで「むかしのうつくしさ」は失われ「雪のやう成りし色ハくろミにくろミて高かりしはなのミいちじるく」、肩幅も狭くなり、「膝」の肉も落ち、痩せこけて「打ミる所ハ四十男といふとも偽ならず見」え、かつての恋情も消え果てて「誠の兄君伯父君などのやうに」しか感じられない。しかも「この人ゆゑに人世のくるしみを尽していくその涙をのみつる身とも思ひしらねばたゞ大方の友とや思ふらん」桃水に対し、一葉は「仮にも此人と共に人なみのおもしろき世を経んなどかけても思ハず」「たゞなつかしくむつまじき友」と思うだけであった。この日、一葉が桃水を訪ねたのは、かつての恋人との再会に胸騒ぐ気持ちもあったろうが、真意は前日の眉山来訪で火のついた新作へのサジェスションでも得られればということだったのではなかろうか。だが、眼前の桃水はかつての精気を失い、好々爺然としているのみで、とても新たな創作の相談に及べるような容子ではなかった。恋の面でも文学の上でもすっかり熱の冷めた一葉にとって、桃水は単に「なつかしくむつまじき友」の一人に成り下がったのである。

六月十日には「小説著作に従事す　全編十五回・七十五枚斗のものをつくらんとす　いまだ筆おもふまゝに動かでいたづらに母君の叱責をのみうけぬ」との記事がある。「小説著作に従事す」との簡潔な一行には、桃水の容子などから誰にも頼らず一人で新作の執筆に集中しようとの意気込みがうかがえる。だが、「全編十五回・七十五枚斗」の構想だけは立ったものの、実際の執筆は難渋をきわめた。この苦戦中の「小説」が『にごりえ』の下書きであるのはほぼ確実だが、その苦闘する背中に向けて「母の叱責」が飛ぶ。すなわち、一刻も早く作品を完成させて原稿料を入手せよと急き立てる容赦のない声が浴びせられたのである。それは約一ヶ月後に迫る七月十二日の父の則義の七回忌法要の費

用が必要だったからである。一葉自身も費用の工面に腐心し、博文館の大橋乙羽や夫人時子に依頼するが、その交渉（大橋夫妻からの来簡）で担保とされた「かきもの」こそ完成間近の『にごりえ』であった。関良一[注12]によれば、八月二日には現行テキストが完成し、『にごりえ』の題で「文芸倶楽部」第九編（明治28・9・20）に発表された。ただし、「筆おもふまゝに動かで」とあるように執筆は難渋し、「全編十五回・七十五枚斗」の予定は、原稿料入手を急がせる「母君の叱責」もあってか、全八章・五十枚余りに縮小された。金銭のために不本意な完成を強いられた『にごりえ』ではあるが、眉山の語った「自伝」とはいかなくとも、下層社会の泥水＝にごりえに呻吟する酌婦たちの苦衷は、新開地の隣で金銭地獄に追われる一葉の苦悩とも共振している。ただし、主人公お力と作家一葉の関係にはさらに複雑な別の意味もあったと思われる。

八

物語にもどれば、お力はなぜ結城との関係に深入りせず、酌婦を続ける決断をし、源七との関係を清算することなく〈心中〉にまで及んだのか。彼女がその時々に選んだ道筋は、一見したところ、むしろ不幸に向ってみずから下り坂を転げ落ちてゆく選択であるかのように見える。いわば抗いようのない境遇ゆえに仕方なくその時々の道を受動的に選ぶしかなかった、と。もしそうなら、お力は同情すべき〈哀れな女〉であり、社会の底辺における苦悩を一身に背負い、その犠牲になった女ということになる。現に『にごりえ』のモデルでもある新開地の銘酒屋街に生きる女たちは、一歩踏みはずせば一葉自身の〈明日の姿〉だったろうし、それゆえ一葉は酌婦の一人の苦境を救おうとしたり、客への代筆を引き受けるなど、その応接はきわめて親身なものであった。

では、作家一葉は、主人公お力の一生を〈哀れ〉な敗残の人生として同情的な眼で見つめていたのだろうか。たとえば〈哀れ〉とみる印象を排し、お力の行動を予断を排して見直してみよう。彼女の足跡をみると、資産家の息子で高等遊民らしき結城の気まぐれに深入りせず、みずから酌婦稼業を続ける決断を下し、父祖（家族）との紐帯を信じてその宿命を受け容れ、源七の純愛に死をもって応えたのである。そして、それはすべてお力が自分で下した判断である。むろんどの場面にしても実利的な他の選択がありえただろうが、お力は実際そうはしなかった。言い換えれば、お力は結城に甘い幻想を抱かず、父祖への信服は揺るがず、世間の眼がどうあれ不遇な男の純愛に応え、予期どおり彼の手にかかる〈自殺〉を選んだのである。つまり、彼女はみずから信じる道を自身の思いに従って選択したにすぎない。してみると、零落した中年男との〈心中〉で幕を閉じたお力の一生は、世間的価値観でいえば〈哀れ〉な敗残の人生と見えるかもしれないが、その実、自身の信じる道筋をみずから決断し、その意志を貫いた人生

だったといえる。とすれば、一葉がお力という存在をどのように見ていたかは改めて考え直してみる必要がある。

試みに、お力の生涯と作品執筆前後の一葉が抱え込んだ現実とを並べてみると、『にごりえ』は意外に一葉の実生活とリアルタイムにリンクし、それが時に濃縮されたり反転されたりした作品だといえよう。

たとえば、父祖（家族）との紐帯を固く信じるお力に対し、一葉の家族に対する思いはどうだったか。眉山との対面に刺激をうけ、意欲的に新作に取り組んで苦闘する長女に対し、原稿料の入手をあせって苛立ち気味に「叱責」する母の姿は、一葉に改めて〈家族〉とは何かを考えさせなかったろうか。七回忌を迎えた亡き父は、母とは違い、かつて彼女の学業継続の願いを理解してくれる存在だった。作中の「盂蘭盆会」は父の七回忌から連想された設定であり、お力の父祖への信服は一葉の父に対する愛着の変形とも考えられる。法事に必要とはいえ金の亡者さながらに娘を「叱責」する眼前の母とは対照的に、亡き父への懐かしさはその不在ゆえにいっそう増幅されたに違いない。父祖に繋がる宿命を受け容れたお力像は、一葉の亡父に対する思慕を濃縮し先鋭化させた姿ではあるまいか。また、一葉の桃水への恋情は「仮にも此人と共に」とは「かけても思ハ」ぬと言い放つほどに冷めきってしまう。この虚しい恋の末路と対極にあるのが、源七の純愛に応えたお力の〈覚悟の心中〉といえよう。さらに、竜泉寺時代に一度は生活のために筆を折り、「文學は糊口の為になすべき物ならず」（明26・7・1「につ記」）と述べた一葉だが、結局は原稿を金銭と交換する執筆活動を続けることになる。そうした一葉の生活ぶりとはうらはらに、お力はリスクを承知で酌婦を続ける決断を下す。前年（明27）三月、秋月の偽名で天敬顕真術会の久佐賀義孝を訪ねて相場師となるための資金援助を請い、七月には援助の交換条件として妾になれと言われるなど、借金のためには手段を選ばぬ一葉の生活に比べ、一時は結城に傾いて（結城以外でも）玉の輿に乗る可能性がありながらお力は結局源七の思いに応える選択をする。一葉の怪しげな綱渡りに比して、酌婦稼業を決断し、〈心中〉を覚悟したお力はむしろいさぎよく、その信条や矜持も揺らいではいない。

こうして見てくると、お力の歩んだ道は、むしろ一葉には到底及ばぬいさぎよい人生だったといえるのではなかろうか。世間からはたとえ敗残の誹りを受けようと、お力はその時々にみずから後悔しない道を選んだのであり、死をも見据えたその選択はあたかも〈武士〉の覚悟に似ている。かつて一葉は〈士族〉出身の矜持を誇るかのように「虚無のうきよに、好死処（よきしにどころ）あれば事たれり」（「日記」明26・7・25）と壮語を書きつけた。『にごりえ』末尾の〈心中〉は確かに無惨で〈哀れ〉と見えるが、お力にすれば「虚無のうきよ」（にごりえの世の中）に流されることなく「好死処」を得た終幕を迎えたといえる。つまり、お力の生涯は、かつ

ての一葉の壮語を地でゆく〈武士〉的な一生だったのである。とすれば、一葉にとってお力は同情すべき〈哀れな女〉ではなく、自身の「好死処」をみずからの意志で選びとり、自身の考える人生をまっとうした、うらやむべき女主人公だったということになる。

人間の業といえる「愁ひ」に殉じた異形の〈道行〉は、市井の片隅で起きた時代錯誤な痴情事件として、金銭の論理が支配する近代の大きなうねりに一瞬で没してゆくだろう。しかし、その〈哀れ〉と見える〈道行〉を選んだお力の生涯こそ、実は一葉がひそかに願った「好死処」を実践した見事な終幕であり、「愁ひ」が最も人間的な尊厳の証左であることを物語る人生であった。『にごりえ』は、作家当人と同じ社会の底辺でもがく女の生涯に託し、一葉自身の〈見果てぬ夢〉を投影したあり得べき〈精神的自画像〉だったのである。

【注】

（注1）梅光学院大学「日本文学研究」53号（平30・1）

（注2）戸松泉「『にごりえ』論のために――描かれた酌婦・お力のために――」（「相模国文」18、平3・3）、出原隆俊「『にごりえ』の〈彼の人〉」（「文学」平6・春、岩波書店）、山本欣司『樋口一葉　豊穣なる世界へ』（平21・10、和泉書院）第七章、滝藤満義「『にごりえ』論」（「横浜国大国語研究」12、平6・3）など、いずれも「彼の人」を「上客」とみなし、長大な手紙についてもお力が「上客」に来店を促す営業的な手紙と読む。

（注3）前田愛『樋口一葉の世界』（昭53・12、平凡社）所収「『にごりえ』の世界」（「立教大学日本文学」、昭46・6）。前田論はすべてこれによる。

（注4）「めざまし草」巻之十五（明30・3）における「概論家」の言及。

（注5）（注3）に同じ。

（注6）朴那美「樋口一葉の『にごりえ』と近松門左衛門の『心中天の網島』――その愛の形、行方――」（平12・3、「東アジア　日本語教育・日本文化研究」第二輯）は、二編を比較し、登場人物は照応するが、一葉作品に近代的な「リアル」さがあるとする。

（注7）戸部銀作『【新版】歌舞伎事典』（平23・3、平凡社）所収「道行」

（注8）原道生『近松浄瑠璃の作劇法』（平25・11、八木書店）所収「死の道行」

（注9）『樋口一葉　考証と試論』（有精堂、昭45・10）所収「『にごりえ』考」（「文学」昭29・7、岩波書店）。前田論の初出（注1参照）は関論の十七年後である。

（注10）例外として金井景子の「『女』の来歴――『にごりえ』論への視角」（「媒」）は、関氏の噂の分析を「読みの醍醐味あふれるもの」と高く評価している。

（注11）（注8）に同じ。

（注12）（注9）に同じ。